

前回は16章19～31節を通して、金持ちとラザロのたとえ話を学びました。そして、私たちが神を頼って生きているのか、金に依存して生きているのかが問われ、共に考えました。

1. つまずき (1～2節)

- ①避けられないつまずき (1)「イエスは弟子たちにこう言われた。『つまずきが起こるのは避けられない。』」

つまずきの原語「スカンダロン」は、わなのえさをつける棒のことで、比喩として「人を誤らせ滅びに導くもの」となるのです(ローマ11:9)。また、プロスコムという言葉は障害物を意味します。イエスが弟子達に「つまずきが起こるのは避けられない」と言われたのは、イエスの福音が伝えられるときに、その障害となる存在は必ずあるということを言われています。

- ②つまずきを起こさせる者 (1)「つまずきをおこさせる者はわざいわいだ。」

避けられないとはいえ、つまずきをおこさせる者はわざいわいだ、とされています。ローマ人への手紙9章23節に「見よ。わたしはシオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は失望させられることがない。」とイザヤ書から引用しています。つまずきは避けられないとはいえ、主に信頼することがつまずいても失望はしないことは励ましです。

- ③小さい者につまずきを与える者 (2)「この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであつたら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海になげこまれたほうがましです。」

「この小さい者たちのひとりにつまずきを与える」とありますが、文字通りの幼子はもちろんのこと、弱さを抱える者、苦しむ者、悩む者などにつまずきを与えるなら、そんな人は、「石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれた方がましだ」との激しいお言葉を主は言われます。私たちもつまずきの石となりかねないことを覚悟したいものです。

2. 兄弟への関わる時の信仰 (3～6節)

- ①兄弟への戒めと赦し (3)「気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。」

マタイの福音書では「兄弟が罪を犯したなら、行ってふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。」(18:15)とあり、兄弟を得ることに強調があります。ルカの福音書では「悔い改めれば、赦しなさい」とあり、悔い改める者を赦すことに重点をおいています。

- ②七度罪を犯し悔い改める者に (4)「かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

マタイの福音書でも21節以下では、ペテロが「私に対して七度罪を

犯した場合、何度まで赦すべきですか。七度まででしょうか」と問うた時に、イエスは「七度を七十倍にするまで」(21~22節)とされています。ルカの福音書では一日に七度罪を犯しても、七度悔い改めに來るなら、そのたびに赦してやりなさいとあります。どちらにせよ、赦す心の大切さが記されているのです。

- ③からし種ほどの信仰(5~6)「使徒たちは主に言った。『私たちの信仰を増してください。』しかし主は言われた。『もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ』と言えば、言いつけどおりになるのです。』

つまずきの問題であれ、赦しの問題であれ、これまでの信仰ではだめだと感じた使徒たちは主に頼むのです。「私たちの信仰を増してください」と。すると、主は「からし種の信仰があるなら、桑の木が根こそぎ海の中に植われ」という命令もその通りになる」と言われるのです。本物の信仰こそが課題を果たす鍵なのだということです。

3. しもべである者たちのありかた(7~10節)

- ①しもべが野から帰ってきた時(7)「ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野から帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい。』としもべに言うでしょうか。」

イエスからのたとえを通しての問いかけです。ある主人に、耕作者か羊飼いをするしもべがいるという設定です。しもべが野から帰ってきたとします。帰ってきたしもべに対して、主人である者たちは、丁寧に「さあ、さあ、ここに来て食事をしなさい」と言うでしょうかという問いです。主人としもべ(奴隷)の関係はどんなものかを問われているのです。

- ②しもべのすることは(8~9)「かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい』と言わないでしょうか。しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するのでしょうか。」

どんなよく働いてくれたとしても、しもべが帰ってきた時には、「さあ、食事の用意をし、その後は給仕をしなさい。自分の食事はその後だ。」というでしょうと語られました。なにしろ、しもべはその義務を果たして当たり前で、主人はしもべに感謝することなどないというのが普通だ、と結ばれるのです。

- ③しもべの姿勢(10)「あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

このことは私たちにもあてはまると主は言われます。つまり、自分に言いつけられたことを、全部してしまっただけとしても、「私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです」とへりくだることが、しもべの順当な在り方だと言われるのです。

《展開と結論》

今朝の聖書箇所では前半において、つまずきの石になることの罪の大きさと、人が一日に七度罪を犯しても悔い改めにやってくるなら赦しなさいと教えられました。実際のところ、人々のつまずきになるというのは、自分でも気づいていない場合があります。意識的に人をつまずかせてしまうこともあります。また、「赦すこと」については、一日に七度も罪を犯す人を赦すというのは容易ではありません。そのなかには暴力や暴言もあるかもしれません。しかし、ごめんなさいと悔い改めるなら赦しなさいと教えられます。こうしたことは現代において、様々な議論があるかもしれません。つまずきの石といっても、つまずいた人が悪い場合もあるのではとか、赦してしまっただけはその人のためにならないのでは、等々。しかし、主イエスは原則を述べておられるのです。弟子たちも困り、それでは自分たちにはそれを実行できないので、信仰を増してくださいと願っていました。するとイエスは、からし種ほどの信仰があれば目の前の桑の木も海に植えられると言われ言われました。からし種は極小の種です。それほどでも本物の信仰があれば、事はなると教えられたのです。改めて、私たちの信仰が問われていますが、それではどうすれば良いのかということにもなります。マタイの福音書18章は並行記事ですが、このようなヒントとなるイエスの言葉が記されています。「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられる父は、それをかえてくださいます」(19節)。信仰が小さな者たちでも、共に心を合わせて祈ることが課題を実行する道であることが示されています。

そして、もう一つは、主人としもべのたとえ話から出てくる事柄です。このたとえ話も今日の見方から、主人としもべの関係は今日では異なることでしょう。しかし、ここで主イエスは、しもべ(奴隷)の関係とたとえをとおして、何事かを教えようとされているのです。すなわち、しもべは労働をして帰った後であっても、主人の食事作りをし、給仕をしなくてはならないのです。それは、主人にとってもしもべにとっても当然のことでした。そのことから仕える心(サーバント・ハート)を学ぶことが私たちにとって必要なことなのです。つまり、神を主とした者にとっては、主のために自分が何事かをなしたとしても、それは誇るべきではないということなのです。自分は主のしもべとして、なすべきことをしたにすぎないという自覚こそが大切なのです。そればかりか、「自分は役に立たないしもべです」と言うことも、決して自己卑下ではなく、主のしもべとして、もっと優れた奉仕ができるかもしれないという謙虚な思いがあるからです。

かつて、私より二回りほど若い牧師が中会の説教でこの観点で話されたことを聞いて、安心した事があります。この精神があつてこそ、主の奉仕ができると思ったことでした。私たちクリスチャンはすべからず、主のしもべです。仕える心をもって働き、謙遜な心をもって人と関わっていくことが大事なのです。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。」(ピリピ人への手紙2:3)